

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531265

研究課題名(和文) 知的・創造的英語コミュニケーション能力を伸ばす進学高校英語授業改革モデルの開発

研究課題名(英文) Developing a English classroom reform model for cultivate intellectual and creative communication abilities in college-entrance oriented high schools

研究代表者

巨理 陽一 (WATARI, Yoichi)

静岡大学・教育学部・講師

研究者番号：90509241

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、平成21年3月告示の高等学校学習指導要領「外国語」の方針に則り、普通科高校における英語授業の改革の具体的モデルを示すことである。多くの普通科高校で行われている訳読と文法説明一辺倒の授業を克服して、本来のコミュニケーション能力を育て、なおかつ進路選択のニーズにも対応でき、しかも英語という教科の特徴を生かして生徒の知性を高められる授業のモデルの開発である。改革モデルは教材・授業運営法・言語活動の3領域にまたがって開発し、実際に高校の授業において学習効果を確認した上で、その成果を出版物や研究発表会を通して広く全国に還元した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop a specific model of reforming Japan's high school English classes in the direction of helping students develop their human character and building better interpersonal communication abilities as well as developing their English abilities, through changing English education from mindless examination preparation to a more fruitful process of intelligent learning experiences.

To help make English classes more efficient and intelligent, this study implemented three plans: 1) Analyzing today's college-entrance examinations extensively, 2) developing and publishing textbooks containing suitable materials from various fields, rich in content and style, and 3) designing English lesson plans that develop students' English abilities, contribute to building students' human character, and help develop students' life perspectives, and improving it through classroom practice in high schools and universities.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：英語授業 テキスト 教材 授業プラン 頂上タスク 入試分析 知的・創造的コミュニケーション能力

1. 研究開始当初の背景

日本の学校英語教育で英語運用力を高める努力の必要が叫ばれて久しい。この要請に応えることは、生徒の切実なニーズに応えることであり、また日本の真の国際化に必須である。

それにもかかわらず、今日なお多くの進学高校では、依然として文法訳読式の授業とドリルの補習授業が行われている。これは英語運用力を高め、知的な英語コミュニケーション力を育てるには不十分である。われわれはこの問題の主たる原因として次の4つがあると考えた。

- (1) 実行可能な改革モデルの欠如
- (2) 大学入学試験問題の変化に対する理解不足
- (3) 生徒の「受験に役立つ授業」への固定観念
- (4) 適切な教材・指導書の不足

上記の状態を改善するために、下記の研究の実施を計画した：

- ・ 研究A：改革的授業を可能にする新タイプの教材集の編集
- ・ 研究B：高校での授業実践を通じた改革的授業プログラムの検証
- ・ 研究C：改革的授業法の教師用指導書の作成

本研究は、これまであまり手をつけられてこなかった進学高校の英語授業を、コミュニケーションを指向しつつ知的・創造的活動を中心とするものに改革することを目標とし、しかも入試・成績に敏感な生徒や保護者に受け入れやすい形で具体的モデルを提示しようとするところに特徴がある。学習指導要領改訂によって「コミュニケーション英語」が中心的科目として据えられようとしていた時期に、本研究がその具体的運営法のモデルを提示したことは、時宜に叶った意義があったと考える。さらに Web ページ等を通じた教材や研究成果の広範かつ迅速な共有・還元を可能とする体制を構築し、現場教員との協働による英語教育研究の持続可能なモデルを提起した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、平成 21 年 3 月告示の高等学校学習指導要領「外国語」の方針に則り、普通科高校における英語授業の改革の具体的モデルを示すことである。これは、多くの普通科高校で行われている訳読と文法説明一辺倒の授業を克服して、本来のコミュニケーション能力を育て、なおかつ進路選択のニーズにも対応でき、しかも英語という教科の特徴を生かして生徒の知性を高められる授業のモデルの開発である。改革モデルは教材・授業運営法・言語活動の3領域にまたがって開発し、実際に高校の授業において学習効果を確認した上で、その成果を出版物や研究発表会を通して広く全国に還元する計画である。

3. 研究の方法

本研究は基本的に、研究A(改革的授業を可能にする新タイプの教材集の編集)の上に研究B(高校での授業実践を通じた改革的授業プログラムの検証)を積み重ね、更に研究A・Bの上に研究C(改革的授業法の教師用指導書の作成)を積み重ねながら、必要な場合に前の研究の修正を図る方式で、年次進行で行った。本研究は14人のメンバーで構成された。各研究は、分担した作業の経過をメールやWebを通じて全員で共有し、それぞれに置くチーフと研究統括者が随時調整を行いながら進め、定期的に開催するミーティング・研究会で最終的な準備やまとめを行うという形で進められた。各研究の成果はその年度中に学会・シンポジウム等にて発表すると共に、当該年度中に出版物として公表した。

4. 研究成果

2011年度は、研究A(改革的授業を可能にする新タイプの教材集の編集)に取り組み、豊かな内容の伝記・記録・スピーチ・手紙・論説・物語・映画・詩などの推薦・教材研究、生徒に要求される(形成される)能力についての議論およびメンバー間の相互検討を経た16本のオリジナル教材・授業案集を、(1)の中間報告書(全161ページ)として200部印刷し、主催シンポジウム(3月、キャンパスプラザ京都(京都府))等にて配布した。

- (1) 伊佐地恒久・三浦孝・柳田綾・関静乃・巨理陽一・山本孝次・茶本卓子・永倉由里・鈴木章能・竹内美芳・加藤和美(2012). 『知的・創造的英語コミュニケーション能力を伸ばす進学高校英語授業改革モデルの開発』平成23年度科学研究費事業学術研究助成金研究成果中間報告書

2012年度は、研究B(高校での授業実践を通じた改革的授業プログラムの検証)に着手し、物語文4本・論説文9本からなる(2)の具体的な授業プログラム(1時間ごとの学習指導案集、全197ページ)をまとめ、200部印刷し、主催シンポジウム(12月、名城大学名駅サテライト(愛知県))等にて配布した。

- (2) 三浦孝・伊佐地恒久・後藤伸之・永倉由里・伊藤高司・関静乃・竹内美芳・對馬信之・山本孝次・巨理陽一・柳田綾・峯島道夫・大橋昌弥(2012). 『知的・創造的英語コミュニケーション能力を伸ばす進学高校英語授業改革モデルの開発：授業プラン集・改訂版』平成24年度科学研究費事業学術研究助成金研究成果報告書

ここには、これまでの成果として得られた改革的授業プログラムの7原則、および単元の目的・目標・頂上タスク、7原則と対応させた各periodの展開案、ワークシート等が示

されている。

併せて、研究 B の予備的研究として、2 年度にまたがって大学入試の問題分析に取り組んだ。まず 2008 年度と 2009 年度の抽出 33 大学、文系・理系 91 入試の 3626 問を 3 類型に分類し、いわゆる文法訳読式授業で対応できる問題 (A 型) が問題数ベースの全体の平均で 40.41% である一方で、概要・文脈の把握や推論、文章構造の理解といったことを求められる、いわゆるコミュニカティブな授業に合致するタイプの問題 (B 型) は 17.22% であることを示した。併せて B 型問題の出題割合が多くなればなるほどその入試全体の英文量 (問題指示文・出題文・解答選択肢の総語数) が多くなるという相関関係が示され、出題割合が高くない入試の多くにおいても B 型問題の存在は確認された。

次に、残りの 42.37% を占めた、A 型・B 型いずれの基準にも当てはまらない問題 (0 型) に対して、質問タイプと参照文脈の観点から内容分析を行った。質問タイプについて、いわゆる内容確認問題はテーマ質問と推論質問が約 6 割を占め、空所補充問題は推論質問が約 8 割を占めることが明らかになった。参照文脈について、会話問題においては言語的文脈を参照する問題が約 6 割、非言語的文脈を参照するものが約 4 割、論説文問題では言語的文脈を参照するものが 6 割以上であることが示され、その参照範囲は語句レベルの極めて局所的なものであった。総じて 0 型問題においては、多くの英文を短時間で読み把握できるかどうか問われており、そのために必要な語彙力や表現力が併せて問われているという性格が明らかになった。

2013 年度は、研究 B (高校での授業実践を通じた改革的授業プログラムの検証) をより確かなものとしながら、研究 C (改革的授業法の教師用指導書の作成) に着手すべく、(2) とその試行的実践結果に基づいて検討を重ねた。具体的には 2012 年 11 月から 2013 年 7 月にかけて、高校・大学において延べ 438 名に対して同教材を用いた 10 の実践 (延べ 2500 分) を行い、(2) で示した 7 原則のうち特に力を入れた項目、生徒/学生の反応、教師の感想・改善点を収集・分析した。この結果を踏まえ、教材および教師用指導書としてそのまま授業で使用できる『Trinity English』Series Book 1-3 (テキスト・ワークシート集・指導プラン例) を作成し、その内 Book 1 については浜島書店の協力を得て 1000 部を印刷・配布し、Book 2、3 についてはプロジェクトの Web 上で公開した。

以上の成果全体と残された課題について、主催シンポジウム (3 月、名城大学名駅サテライト (愛知県)) において報告を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 11 件)

- (1) 鈴木章能, Need for anglophone literature for Japanese students in a globalized society: developing a resilient life, Lit Matters: the Liberlit Journal of Teaching Literature, 査読有, 1 号, 2014 年, 印刷中
- (2) 鈴木章能, 生きる喜びを見い出す英語の授業: 英語教育改革一案あれかこれかを越えて, 片平, 査読有, 49 号, 2014 年, 183-196 ページ
- (3) 永倉由里, 英語授業で動機づけと自律を促す意義とその可能性, 常葉学園短期大学紀要, 査読無, 44 号, 2013 年, 33-46 ページ
- (4) 亘理陽一, 技能統合型のオリジナル教材を作る: 「頂上タスク」から基礎知識・技能まで, 英語教育, 査読無, 62 巻 2 号, 2013 年, 29-31 ページ
- (5) 永倉由里, 「Learning Journal」から読み取る英語授業が学習者の学習観に与える影響, 中部地区英語教育学会紀要, 査読有, 42 号, 2013 年, 235-242 ページ
- (6) 三浦孝, 指導困難校での英語教育: 英語を得意にし・英語を好きにさせる指導とは, 静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇, 査読有, 44 号, 2013 年, 55-84 ページ
- (7) 永倉由里, 英語教育改革の動向と求められる英語授業改善, 常葉学園短期大学紀要, 査読無, 43 号, 2012 年, 67-82 ページ
- (8) 永倉由里, 英語学習者の自律と動機づけを促進する方法: 調査, 中部地区英語教育学会紀要, 査読有, 41 号, 2012 年, 235-241 ページ
- (9) 三浦孝, 小学校英語活動導入を踏まえた中学校英語授業のあり方, 静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇, 査読有, 43 号, 2011 年, 25-40 ページ
- (10) 永倉由里, 英語学習者の自律と動機づけを促す授業実践の方向性, 常葉学園短期大学紀要, 査読無, 42 号, 2011 年, 35-48 ページ
- (11) 関静乃・加藤和美・茶本卓子・永倉由里・三浦孝・亘理陽一, 現代の大学入試問題に、文法訳読式授業はどれだけ対応できるか: 高校英語授業改革プロジェクト発表その 1, 中部地区英語教育学会紀要, 査読有, 40 号, 2011 年, 315-322 ページ

〔学会発表〕(計 20 件)

- (1) 三浦孝・亘理陽一, 知的な英語コミュニケーション力を育てるための 7 つの原則: プロジェクト 3 か年間の成果と課題, 知的なコミュニケーション力を育てる高校英語教育シンポジウム・完結編, 2014 年 3 月 9 日, 名城大学名駅サテライト (名古屋市、愛知県)

- (2) 鈴木章能、生き方が見える英語の授業：他国と日本を比較しつつ、知的なコミュニケーション力を育てる高校英語教育シンポジウム・完結編、2014年3月9日、名城大学名駅サテライト（名古屋市、愛知県）
- (3) 永倉由里、知的なコミュニケーションを育てる英語授業、知的なコミュニケーション力を育てる高校英語教育シンポジウム・完結編、2014年3月9日、名城大学名駅サテライト（名古屋市、愛知県）
- (4) 鈴木章能、英語圏文学の使い方（「生きる喜び」を感じる英語授業）言語教育エキスポ 2014、2014年3月9日、早稲田大学（東京都）
- (5) 亘理陽一、What do you mean by “explicit”？ A methodological consideration in explicit grammar teaching research, BAAL 2013 Conference (46th Annual Meeting of the British Association for Applied Linguistics: The Impact of Applied Linguistics, 2013年9月5-6日、Heriot-Watt University (Edinburgh, Scotland, UK)
- (6) 三浦孝・亘理陽一・伊佐地恒久・伊藤高司・對馬信之・永倉由里・峯島道夫・山本孝次、知的・創造的英語コミュニケーション能力を伸ばす高・大英語授業の原則と実践報告、全国英語教育学会第39回北海道研究大会、2013年8月11日、北星学園大学（札幌市、北海道）
- (7) 鈴木章能、中庸の英語教育：教育学、仕事現場の声、世界文学の視座から、第85回日本英文学会全国大会、2013年5月26日、東北大学（仙台市、宮城県）
- (8) 鈴木章能、Reading Anglophone Literature is all the More Important for the Importance of English in the Globalized World, International Conference: “The Future of English in Asia: Perspectives on Language and Literature,” 2013年4月19日、香港中文大学（沙田区、香港）
- (9) 亘理陽一、大学入試問題分析と新学習指導要領（【シンポジウム】新学習指導要領と高校英語教育の展望）三重高英研冬季研究会兼総合教育センター研修講座、2013年1月21日、三重県立川越高等学校（三重郡川越町、三重県）
- (10) 三浦孝・伊佐地恒久・伊藤高司・大橋昌弥・加藤和美・杉山剛浩・関静乃・竹内美芳・永倉由里・山本孝次・亘理陽一、知的プロセスを大切にした高校英語授業のモデルの開発、全国英語教育学会第38回大会、2012年8月5日、愛知学院大学（名古屋市、愛知県）
- (11) 亘理陽一・伊佐地恒久・関静乃・三浦孝・山本孝次、大学入試英語問題はどのような力を試そうとしているか？：33 国立・私立大学の入試問題詳細分析、全国英語教育学会第38回大会、2012年8月5日、愛知学院大学（名古屋市、愛知県）
- (12) 三浦孝、英語表現に顕われた英語的発想、中部地区英語教育学会第42回岐阜大会、2012年7月1日、じゅうろくプラザ（岐阜市、岐阜県）
- (13) 永倉由里、「Learning Journal」から読み取る英語授業が学習者の学習観に与える影響、中部地区英語教育学会第42回岐阜大会、2012年6月30日、じゅうろくプラザ（岐阜市、岐阜県）
- (14) 三浦孝、From textbook to real exchange of ideas, 平成22年度三重県外国語指導助手中間期研修会、2012年1月13日、三重県教育文化会館（津市、三重県）
- (15) 鈴木章能、On issues of Japanese English learners, The Society of English Teaching at Jilin University, 2011年11月28日、吉林大学（長春、吉林省、中華人民共和国）
- (16) 三浦孝、Textbook-based real exchange of ideas in English: Beyond mechanical comprehension check-ups, 37th JALT Annual International Conference on Language Teaching and Learning, 2011年11月19日、国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都）
- (17) 永倉由里、英語学習者の自律と動機づけを促進する方法：調査、中部地区英語教育学会第41回福井大会、2011年6月25日、福井大学（福井市、福井県）
- (18) 三浦孝、コミュニケーション能力と知性を育てる英語教育、石川県高等学校教育研究会英語部会、2011年6月17日、石川県教育センター（金沢市、石川県）
- (19) 亘理陽一、Disproving a myth about ‘Juken-eigo,’ JALT Junior/Senior High School SIG Workshop “Changing Together!” 2011年6月12日、法政大学第二中・高等学校（川崎市、神奈川県）
- (20) 三浦孝、Teach where they’re already motivated, JALT Junior/Senior High School SIG Workshop “Changing Together!” 2011年6月12日、法政大学第二中・高等学校（川崎市、神奈川県）
- 〔図書〕（計3件）
- (1) 柳瀬陽介・組田幸一郎・奥住桂・亘理陽一・鈴木章能ほか、ひつじ書房、英語教師はたのしい、2014年、印刷中
- (2) 伊佐地恒久・永倉由里、浜島書店、Trinity English Series Book 1、2013年、64ページ
- (3) 江利川春雄・亘理陽一ほか、大修館書店、協同学習を取り入れた英語授業のすすめ、2012年、272ページ
- 〔その他〕
ホームページ等

<http://www.ecrproject.com/> (生き方が見え
てくる高校英語授業改革プロジェクト)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

巨理 陽一 (WATARI YOICHI)
静岡大学・教育学部・講師
研究者番号：90509241

(2) 研究分担者

三浦 孝 (MIURA TAKASHI)
静岡大学・教育学部・教授
研究者番号：30279989

永倉 由里 (NAGAKURA YURI)
常葉大学短期大学部・英語英文科・教授
研究者番号：00369539

鈴木 章能 (SUZUKI AKIYOSHI)
甲南女子大学・文学部・教授
研究者番号：70350733